Eldonas KouMUKAI
2-12-2 Asahimachi, Abeno, Osaka,
20, Maj, '83. N-vo 268
イオム通信
大阪市阿倍野区朝日町2-12-2 向井孝

▼前号（3月23日付発行）262号としたが正しくは263号、で、今号で修正しました。

▼3月26日大阪をたって、その夜は宮城県古川市荒井さん宅へ…にはじまった北海道への旅。札幌―静内―広尾とうぐくうち、いつのまにか、ゆっくりのんびりのローカル時間になじんで、もう大阪へ帰ることなど、どこかに遠く置いてきたような、ナント18日間の長旅。4月11日夜9時すぎ、るり子はん、おかもっちゃん、丸尾くん、芽村くんの四人が「おさきまっくら」作成中のところへ、「やあ今晩は、お久しぶり。どうもおそなって…」と、どきまぎしての帰宅？が一声というわけでした。

▼帰路、東京に下車。4・10大森判決弾がい報告集会に上京してきた大阪のK君M君にまずきいたのは、『四・二九な　か天皇が気になる日々の準備どうなってる？』―に対しての答が「大阪は、燃えてる！」でした。旅のおわりのシメコトバとしてこんなすばらしいことをきくナンテ。

▼ともかく旅の初めから終りまで、ぼくの生涯にもかつてない、日々の発見と目覚めの旅でした。ルス番も含め、たくさんの方にせわになりました。ありがとう。（14日）

補遺 "アイヌモシリへの旅"

―"非暴力直接行動"一三に思うをもとんでみて下さい―

北海道へいってみて、やっと判ったということがある。その判ったことは、既にいま補われている東アの人達とくに大森くんが何度もぼくらに示していたことだった。がぼくにはその一番かんじんなことが全く判っていなかった。そうだ。ぼくには何ひとつ判っていなかったということが、北海道へいって、やっと今頃わかったのだ。

大森判決の意味

未開の新天地！ふかい森と湖をいだいた山脈。ふもとにひろがる広大な沃野。ゆたかであふれんばかりの野や山や海の幸。そこに数千年のむかしから住みつき、平和なくらしを営んできた先住民をかり立て追いたて、あるいはサギペテンに等しい交易や策略による土地とりあげのあげく、居留地などへ追いやったのは……。反抗には血まみれの弾圧、迫害、処刑、そして根絶やし以外の何者でもない同化のムチとアメ政策で、いまも差別しつづけているのは……〈それがインディアンに対するアメリカ合衆国のことではなく〉実に、日本の北海道にすむアイヌなど少数民族に対して日本が、〈そこへ入りこんだ〉日本人がやってきたことなのだ―と言えば、殆んどの　が我が耳を疑い、さらに事実を知って、あまりのことに、やはりぼくのように驚き、たじろぐだろう。しかもそこを、かつての朝鮮や台湾とは全くちがう「日本内地」だと、ずっと思っていたことに。

▼北海道庁は、アイヌにとっては、かつての朝鮮総督府のような悪味をもつ。とすれば、道警や道庁の爆破に対して、誰よりも敏感に（それがたとの犯罪ではなく、反逆・反乱の萌芽として）どんなに畏怖と憎悪のおもいで「権力」が受取ったかは、察するに難くない。

そして支配の貫徹のためにも、即座に犯人をあげ、みせしめにするという权力の至上課題は、デッチ上げでも何でもかんでも、ちょっとでひっかかりがある奴を―ということでの大森くんの逮捕、既定事実としての犯人化が、でてきた所書きだ。

▼ところが権力の第一の誤算は、大森くんが言語に絶する威迫にも屈せず、完全黙秘を貫いて自供書をついにとらせなかったこと。従って物的証拠が全くないデッチ上げを、どう糊塗しようと、裁判過程で検察の主張はボロボロに論破され、マスコミさえ、「無実冤罪」を予想するようになったこと。

そしてサイ二の、最大の誤算は『シャモ自身がアイヌの人たちへの責任をとろうとするかぎり、道庁爆破に対して支持するという立場以外にはない』という立場を、大森えが　獄中に捕われていること、裁かれていることを、むしろかえって武器としてとり出して明らかにし、そのところそこが「大森裁判の意味であると、その孤立無援の闘いのなかで提起しつづけたこと。そして、道庁爆破以上の危険なその思想が、次第にひろがりはじめたことである。

へーここまでかいて、あっというまに一と月ちかくたってしまって、今日は五月十一日。例えば4・29集会資料集にのせた大森くんのメッセージをよんでもらえば、ぼくのかくことなど蛇足でしかないのだが、あと一と言だけ…）

▼それ故、大森くんへの一審死刑判決は、権力にとっては、もはやなりふりかまわぬ必死のあがきであり、超法規的なテロにもひとしい―大森くんの獄中闘争に対する、そのどうしても放置しえない思想に対しての―極刑執行の意志だった。

だが又それは、法治国家を喝え、思想、表現の自由を保障する顔付き遂行権力にとって、ぶっ倒れてアブナイ綱わたりであり、或はいつ破れぬかもしれぬ氷上の湖を、法氷をふむおもいで、ともかくも一度は渡りきった、ということだ。

▼権力が大森くんの獄中闘争と、その思想が提示しているものを恐怖するのは、それが獄内にでなく、獄外へとひろがり伝わるからにほかならない。

一審の七年間、大森くんの厚い壁を徒手空拳で叩きつづけた闘いは、その「無実冤罪」をマスコミにさえ考えさせるまでになった。それは、必ずや、「それなのに、何故、死刑か」の問題と、裁判への疑念へと、人々を動かす端緒となるものである。

そして一審が終ったいま、権力が一そうに恐れるのは、まさにそのような人々が、二審進行のなかでもっとふえ、裁判の公正中立に対して、ふつうあたりまえの人々までが疑念をもって語り出すことだ。さらに、大森支援をいうぼくら自身の問題としてたとえば―大森くんの二審裁判の成行きと結果に対して注目と、その支持の声を運動としてひろめ、力としてとり入れることだ。そのことにおいて、権力のわるあがきを追いつめ、すくなくとも二審の判決をみせかけでも公正なものとし、「無罪」とせざるをえない窮地に立たせるということだ。

（二審大森裁判は、それをどうしても）

▼一審はほとんど大森くんだけの闘いだったことをおもえば、やり遂げねばならない、ぼくら自身の闘いの場であることを銘記したい。

▼〈呼びかけ〉こんど札幌へいって改めて知ったんだが、大森さんの獄中の心遣いはもとより、三人の弁護士への激励（月額五万円とか）など、支援組織が弱いため、その全部をご両親が出しておられた。その分をつくるため、ご両親お二人ともが勤めに出て、お父さんなどは夜会に行けば少なからぬ施設がいるし、その為に休めばその分給料が入って、こうそうたえるというわけで）逮捕当初に一回きたきり、裁判の傍聴も、七年間に今回が初めて、というわけだった。

▽ 控訴審は一一審であれほど見事に検察側立証をやっつけたのにダメだったということをそえば一それ以上、新しいものを出すのはむずかしい、という意味でも、新しい視点での新しい弁護士をせめてもう一名加えて反撃をつくり出したい…が前述のようなことで、経費の点でいまの形では困難という事情がある、という。

▽ そうでなくても、いまぼくらがまず容易にできることとしてすぐにやり初めねばならぬことは、もうはっきりしている。

4月のニジの会ででもしゃべったのだが、ともかく控訴審の期間中と限定して、その裁判費用にすこしでも足し前としてもらうため、毎月一定額を、大森さんのご両親に（直接）届けるということを、実行したい。

▽ ある程度の期間になることを覚悟して、息ぎれせぬ確かな金額を、一括でなく毎月走りつづけるために、（ムリをしないで）

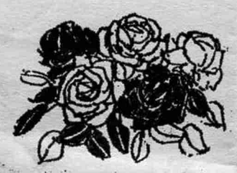
一口・一ケ月五〇〇円（できれば三ケ月以上の前納希望）

（ぼくとしては、せめて20口ぐらい集めたいとねがっている）

申しみは、とりあえず何件と。そのうち何らかの形をつくり出せるが取扱う一そちらから報告がいくようにします。

（なお、毎月一口というのはムズカシイ。一時カンパならーという方もありがたい。それは臨時収入として「基金」とし、一定額に不足したりしたとき、不時の検出や要のときのために運用する。）

どうかよろしく。大森君の無罪勝利のために。（5月13日）



天皇がなにか気になる日 ● 集会考

❶ 4・29―天皇がなにか気になる日集会。ぼくは、あまり手伝いもせず、なるべく口出しを控えて、見物にまわった。それで余計にたえるのだが（仲間ぼめといわれても）大成功。内容も満点をつけたい。

❷ 昨年9月のハラハラ大集会でつくり出したものを土台に、今回はさらに一歩も二歩も内容を深めて―しかも参加者みんなでそれをつくり出すというものだった―それこそ、集会のかえり道、ひとりひとりのポケットにリンゴの丸い重みがはいっている―そんなふうないい集会になったと思う。

❸ ところで、アンケートに「！東ア・大森判決をここまで大きくとりあげるなら、サブタイトルに掲げるべきだし・もうすこしエーヌさんのアメリカの聞いと百合の聞いとをつなげる問題提起がほしかった・プリートークでの各人の発言に要ところの大きい集会だった」（19才・学生・男）というのがあった。

このアンケートは、主催側が意図したものを殆ど正確にうけとめ、タイトルに掲げなかったものをも集会内容からとらえてくれていることでは、これ以上に望めない、ありがたい参加者であることを示している。そして「アメリカの聞いと百合の聞いをつなげる問題提起がほしかった」というのは、役員自身はそれをつないで考えたこと。「ほしかった」はむしろ主催側的立場からの「やり方の勧告」と云えるだろう。参加者が主催側視点に立つ―これこそ、どんな集会でも主催側がねがい期待すること、ちがいない。

❹ では、だからこのアンケートを容れて、主催側はもっとはっきりと自己の主張と意図を打ち出すやり方に変えるべきだろうか。

内容を云えば、4・29のプログラムや進行は「特別に意図してその一つ一つが精的あるいは相乗的に関連し、集会フンイキをつくる」というような配慮が全くないまますべられた。ふつうは必ずある、司会者の前置き的開会辞や、閉会でのとりまとめ的ことばなど一切なしーというのも、司会・進行担当が期日ぎりぎりにきまって、二人の打合せも充分できなかったという、全くの偶然みたいな事情からだった。それが、当日のプログラムひとつひとつの間にある空隙は、かえって「モンタージュ」のような作用を呼びおこし、参加者各人の心裡のなかで相互に関連し、連結したものとなって、集会内容をひとつのものとする総体をつくり出した。だから集会の内容的成功は、ほとんど偶然というか、まぐれ当りだった、ともみることもできる。だがまた、そのように計算しつくされてない、多面性をも持つ、プログラムだったからこそ、集会参加者それぞれが、自分で考え、つなぎあわせてまとめるという―集会づくりへの参加―が出て来たわけだ。それが最後のプログラム、「フリートーク」をもりあげ、かつそれを充実したものにしたのだ、と僕は思う。…とすれば―。

❺ ふつう一般的に云って・〈集会〉とは何だろうか。

(1) 集会を企画し、宣伝し、会場を設営し、さらに当日は会の司会進行、そして何よりもプログラムの実行者である。なぜそんなことをするんか。―それは、(2) その集会で―㋐自己の主張や立場をあきらかにし、㋑参加者の共鳴・支持、仲間の拡大をはかるためである。

とすれば、ざっくばらんにいって主催者は、集会に集った人達を獲物とするために、投網をうつような機会として〈集会をつくる〉ということか。

❻ 人々が集会へいくのは、その内容が ㋐自分が関心を持っていること ㋑関係のあること ㋒役立ちそうだったりためになりそうなこと ㋓おもしろそうなこと ㋔なんか好奇心をそそること…などで、しかも友人に誘われたり、前売券を売り付けられたりして、たまたま当日時間が空いていたーという理由だけにすぎない。

つまり人々は自分の恣意の選択で集会にくるのであり、たとえプログラムにひかれてとは云え、主催者の意図や思惑と全く別の―自分の立場・立場の違いの視点をもって、集会をそらぶ対立者なのである。

❼ そこで出てくるのは、集会は、主催側と参加者が一しょにつくる、という方向だが、それは口先きやうわべのことだけでなく、既成の集会観をまるっきり捨てること。主催者はまず集会のやり方について、自分にきびしい條件、容赦ない條件をつけねばならない。

「條件」とは、あっさりいって、前述の❺の(2)の㋐をひっくるめることだ。

―つまり人々を自分の方へ引きよせるのではなく、自分の方からくくの中へ近づいていくこと。自分の主張・立場を自分のものとしてはつきりしながら、みんなと一緒になること。別の言葉でいえば「統一」でなく「自由連合」を明らかにすること、である。

こんなことぼくの周囲の人たちでは判りきってる。にもかかわらずここにかくのは、例えば紹介したアンケートのような感想が（運動的な人たちには）通用し、いぜんとして一般的だし・また、4・29で中心的積方的に働いた人々が「市民運動的な集会に力を入れるのは今回かぎりにして、もうこれからは、本来の？運動に専念する」と云ったりしたのも、そこに関連して深い根がはびこっている、と思うからだ。

いまぼくらに必要なのは、既成概念での集会観から徹底して解放されることである。（9/6）

雑記 5月は2日から20日まで（ララク・8日の二日間は大阪へ帰ったが）大山ぐらし。6月は多分2・3日頃から20日頃まで、また大山のつもり。緊急用件のときは、速達で、大山市鶴飼町たかい、向井方へ。5/18

（大山のかまぼこ板は―5月はじめきたとき「すごいらん」が庭の一角一帯ほど一めんに咲いていた。それからはあじさい。それとどういうわけか芝生のように「みつば」が群生している。あすびにどうぞ。）